5. 平和な国をとりもどせ

各務原市立鵜沼第三小学校６年
田中　優梨　　狩野　綾香　　岡崎　未佑衣
↓
敦賀市立粟野南小学校６年
川村　ひかる

ある春の日。
ぼくはいつも通り、いじわるでみんなに嫌われている王様のお城で仕事をしていた。
廊下をパタパタと音をたててお姫様が走って来た。
ぼくは横にどいて、おじぎをした。
後ろからは城の家来が姫を追って来た。
「姫様、お戻りください」
なぜ姫様は追われているのか、ぼくにはわからなかった。

その後、ぼくは王様の所へ呼び出された。
王様はいつもどおり不機嫌な顔でこう言った。
「ご苦労だった。明日また頼むぞ。そういえばお前、姫を見なかったか」
ぼくは答えた。
「姫様はさきほど、城の外へ出て行かれました。なぜ家来に追われていたのですか」
その時、王様の顔に怒りが見えた。
「何？　外へ出たと。家来の者はまだつかまえていないのか」
ぼくは、わけがわからなくなった。王様は深いため息をついた。
なぜなのか聞こうとしたら、バンとドアの開く音がした。
そこにはさっき姫を追っていた家来がたくさんいて、みな肩で息をしていた。
一人が話しはじめた。
「姫様は、途中までいたのですが、見事にまかれてしまいました。今、残りの者が探しております。あと……」
家来が途中まで言った時、王様のどなり声でさえぎられた。
「何？　まだつかまえていないのか！　必ずつかまえろと言ってあったろ！」
その声に家来はビクッとして、ハイっと返事をして部屋を出て行った。ぼくは（なぜ姫は追われているのか。いったいこの城で何があったのか）聞こうとしたが、王様はきげんが悪く、ドスドスと自分の部屋に戻りながらぼくにどなった。
「おまえも、もう帰れ！　ジャマだ」
と言った。
ぼくは仕事も終わったので、今日あったことを考えながら帰った。

家に帰ると、なんか変な音がした。
キィ……、キィ……、タッタッタッタ……

　と何かが近づいてくる。
　ぼくの耳にせまってくる。ぼくはとても不安になった。
「どろぼう？　強とう？　野生猫？　ゆうれい……？」
　と、ぼくの頭の中が真っ白になった。恐くなった。
（はっ……）と後ろから何か気配を感じた。
　後ろは何も使ってない空き部屋なのにそこから音が聞こえる。
　ぼくの胸がドクン、ドクンと鳴っている。
　恐い。ぼくはとても恐い。
「もしかしたらどろぼうとか入っていて、うたれて死んでしまうかもしれない」
　ぼくは汗を流した。思いきってそのドアを少し開けた。
「……？　だれもいない」
　と思ったとたん、何かゴニョゴニョ声がした。
　ぼくはそっと見てみると、
「ギャッ！」
「わぁっ」
　姫がいた。
　ぼくはびっくりして、つられて言ってしまった。
「え、何で……、えっ？　どっ、どうして姫がここに？」
　ぼくはさっきよりも混乱してしまった。
「私はりさ。お父様が私をどうしても、優秀な男とお見合いをしろって違う国につれていこうとして。私はいやなの。いくら私がお父様の娘だからって、お見合いなんて絶対いや。だから私はここまで逃げてきたのよ」
（なんで、よりによってぼくの家に？　でもこの姫は、あの王様の娘）
　ぼくは少し興奮気味になった。
　姫が突然こんなことを言い出した。
「ねぇ、この家、あなた以外誰もいない？」
「えっ、いないよ」
「よし、じゃあお願い。この家にずっと泊めてくれないかしら？　お父様、今私のこと探しているの。家来と一緒にね。みつかったらつれていかれてしまうわ。だ・か・ら、この家にいれば安心だと思う。お願いします」
　ぼくは許してしまった。
「ありがとう。この恩は絶対忘れない。本当にありがとう。うれしいなぁ」
　と姫は、とてもにこにこ笑っていた。
　ぼくも何だかうれしくなった。
「ぼくは聖っていうよ。家は古いけど結構楽しいと思うよ。自分の部屋だと思ってのんびりしてよ」
　とぼくは言った。

　そして翌朝、朝六時に目が覚めた。
　仕事、仕事と思ってリビングに行ったら、机の上にたくさんの料理がずらっと並んで

いた。ぼくはすごくびっくりした。
「夢？」
　と眠い目をこすって、もう一度見ても料理が並んでいた。
「あっ、おはようございます、聖。びっくりしたでしょ、この料理。かぞえきれないぐらい用意したわ」
「えっ、何で作ってくれたの？」
　というと、
「料理好きだし、聖のために作りたかった」
　ぼくは料理をパクパク食べた。おいしかった。

　そして二時間が経ったその時、ドアをドンドンたたく音がした。
「おい、この中にわしの娘がいるはずじゃ。あけろ！」
　とよくわからない声がした。姫が、
「お父様！」
　と言ったので、ぼくはびっくりした。
「どうしよう、このままだと……。まずい、もうすぐドアがこわされそうだ」
　と思った時、ぼくはとっさに姫の腕をひっぱって窓から出た。
　王様の家来たちがおそいかかってきた。
　必死に姫をつれて逃げたが、ぼくは家来につかまってしまった。
　姫もつかまってしまった。
　ぼくはろうやに入れられてしまった。

　今、姫は王様の部屋にとじこめられている。
「どうしよう、どうしよう」
　と、ぼくは悩んだ。そして思いついた。
「夜中の二時に姫を助けに行く」
　でも、今度は殺されるかもしれない。
　どうやって助けに行こうか考えた時、となりに大きな岩があった。これをこのさくになげればいいと思いついた。ぼくは一生懸命、岩をさくに投げ続け、二時間後、作戦が成功した。
「やったぁ」
　とぼくは叫んだ。
　予定の二時になった。勇気を出して廊下をぬけ、姫がいるところへとむかった。☆
　ろう下は、ひっそりと静まりかえっていた。
　少し進んでいくと、とつぜん足音が聞こえてきた。
　ぼくは、あわてて物かげにかくれた。ちらっと見ると、それは二人の家来だった。二人は、
「王様はご勝手で世話がやけるよ」
「他にいい人がいないのかなあ。」
　などと、小さな声で文句を言って、ろう下を歩いて行ってしまった。

　ぼくは再び歩き出した。
　王様の声がどんどん近づいてきた。そして、とうとう部屋に着いた。ドアに耳をつけると、中からかすかに姫の泣く声が。
（行こう）とぼくが思った時、中から、
「姫、いつまで泣いているのだ！　もうあきらめろ！」
　という、王様のどなり声がした。
　しまった、王様もいっしょか。王様がいるのなら今のぼくには何もできない。
「あさってに、おまえの相手と結こん式をする。それまでには、考え直して、いいな！」
　あさって……。今日も入れて後二日しかない！
　それまでに助けなくてはならない。
　ぼくは仕方なくろう下を引き返し、ろう屋にもどった。
　こわしたさくは元通りに見えるように立てかけた。
「あーあ、どうしよう……」
　考えているうちに、ぼくはねむってしまった。

　目が覚めると朝だった。
「ん……」人の気配がする。
　さくの間から見ると、番兵だった。
　番兵は、何でこんなことしなくちゃいけないんだ、とでも言う様にめんどうくさそうだった。
「あのぉ……」
　ぼくは小さな声で聞いてみた。
「ん、何だよ」
　番兵がふり向く。
「朝食、もらえないんですか」
「うーん、どうだったかなあ、ちょっとコックに聞いてくる」
　そう言って番兵はろう屋からはなれ、ろう下を歩いて行った。
　しばらくして、番兵は戻ってきたが手には何も持っていなかった。
「コックは『ろう屋にいる人間なんかに食べ物はいらん』と王に言われたそうだぜ。だから食事はなしだ」
　王様はそんなに意地悪だったのか。ぼくは、食べ物がもらえないことより、意地悪だということの方がショックだった。

　それから二時間後、番兵は何も言わずに立っている。
　ぼくは、さっきから言おうと思っていたことを、つい口に出した。
「あの、番兵さん、王様のこと好きですか」
　番兵は、いきなり何を言うのかとびっくりしてふり向いた。
「はあっ」
「だから、王様のことどう思っていますかって」
　ちょっと考えてから、番兵ははき捨てるように言った。

「ふん、きらいだね。なんであんなのが王なんだ。あいつは欲張りで自己中心的で、優しさなんてひとかけらもないぜ。ところで、それがどうしたんだ」
　ここぞとばかりに、ぼくは聞いた。
「じゃあ、王様が姫に無理やり結こんさせようとしているのも反対なんですね」
　すると、番兵は悲しい顔になった。
「そう、もちろん反対さ。王にどなられている時の姫の悲しそうな顔……、こっちまで悲しくなる」
　そう言って、番兵は涙をぬぐった。ぼくも番兵と同じ気持ちになった。そして、こう言った。
「いっしょに王様をたおそう！　そして、平和な国をつくろう！」
　番兵は、最初は信じられないという顔をしたが、それから、大きく「うん」とうなずいた。
「おれの名は、勇（ゆう）。よろしくな！」

　お昼。番兵はどこかに行っていない。
　ろう屋は、しんと静まっている。今ごろ姫は何をしているかな？　そんなことを考えていると、勇が料理をもってやってきた。
「勇さん、お昼にするんですか」
　すると、勇が笑って答えた。
「おまえの分だ、食べろ。コックにおまえの話をしたら、コックのやつ、おれたちに同情してくれた。王には内しょで特別に作ってやろうって」
　おいしいご飯を食べながら、二人は楽しく話した。
「そういえば、おまえの名前は何て言うんだ」
「聖です」
「ふうん、聖か、いい名前だな。ところで聖、おれたちはもう友達みたいなものだ。だから、敬語と『さん』を付けるのはやめてくれ」
「分かった」
　ぼくは、少し気になっていたことを聞いた。
「勇、コックを仲間に入れても、ぼくたち二人じゃ心細くない？」
「どういうことだ」
「つまり、もっと仲間を増やさないかって言いたいの」
　勇は、なるほどとうなずいた。それから少し考えて、
「おい、おれの番兵仲間に、いいかどうか聞いてくるぞ。それでいいな」
　と言って、ぼくの「うん」という返事も聞かずに、ろう下を走っていった。

　しばらくして、向こうから大勢の番兵がやってきた。
　ぼくはこんなにもたくさんの番兵を見るのは初めてで、とてもびっくりした。
　勇が言った。
「おどろいたろう。みんな、おれの仲間さ。おれたちの話を聞いたら、みんな分かってくれた。つまり、全員が聖に賛成さ」

　ぼくは、うれしくなった。
「あのさ、見張りしなくていいの。王様におこられちゃうよ」
　すると、一人が答えた。
「王は今、遠くまで出かけた。夜中まで当分帰ってこないだろう。確か、一人だって」
　よかった、とぼくは思った。

　その後、番兵から召使い、召使いから兵隊…と話は流れ、ついには大臣まで話がいってしまった。そして、みんな賛成してくれた。
　いま、ぼくの話を知らない人はいない。とうとうぼくは、王様以外の全員を味方につけてしまったのだ！

　ぼくは今、姫と相談している。
　姫は、ぼくの話を聞くと、とってもうれしそうな顔になった。
「それはすごいわ。聖ってかっこいいよ」
　とても喜んでくれている。しかし、急に姫が迷い始めた。
「どうしたの」
「お見合い相手が承知してくれるかしら」
　なるほど、そんな問題があった。
「じゃあ、今は王様がいないから、みんなで聞きにいこう」
　みんなは元気よくお城を出て行った。

　結婚式の日、王様はいつにも増して派手な服を着ていた。
　お城はいつもと変わらぬ朝だった。
　とうとう、式が始まった。広間がしんとした。
「姫様のご入場！」
　姫がきれいなドレスで入ってくる。姫は王様の横のいすに座った。
「続いて、おむこ様のご入場」
　おむこ様が入ってくる。ぼうしをかぶっていて、顔が見えない。
　しかし、ぼうしを取ったしゅん間、
「ああっ！」
　王様はおどろいた。ぼうしを取ったその顔は、お見合い相手の顔ではなく、聖、ぼくだ。
　王様は、初めはおどろいていたが、だんだんと顔が青くなり、最後には赤くなってどなった。
「馬鹿者！　なぜおまえがここにいる。どうやってろう屋から出た」
　ぼくはにやにや笑って答えない。
「こいつを、ひっとらえろ！」
　王様が言うと、すぐに番兵たちが走り出し王様をぐるぐる巻きにした。
「こら、何をしておる！　とらえるのはわしでなはない、こいつだ。おまえらも、早くわしを助けろ！」

　ところが、みんなは助けるどころか、さらに王様を縄でしばった。
「こら、痛い痛い、やめろ！」
　すると、召使いの中から、一人の男が走り出てきた。その人をみて、王様はさらにびっくりした。
「おまえは、光人（みつと）」
　それは、召使いではなく、なんと姫のお見合い相手ではないか。
　光人という名の相手が話し出す。
「ぼくは、姫様と結こんできることを、大変光栄に思っていました。しかし、会ってみてどうでしょう。姫は美しいのに、その父である王の態度！　ぼくはこんなやつといっしょになるくらいなら、死んだ方がましだと思いました」
　王様は、かなりショックを受けたみたいだった。
「しかし、姫が……」
　言い終わらないうちに姫が言った。
「私も、みんなに賛成でお父様の考えには反対よ」
　王様は気絶しそうになった。その王様を勇がたたいて起こす。さらに、ぼくは言った。
「おまえなんか王どころか、人間として失格だ！」
　姫も言った。
「そんないやな人、私のお父様じゃない！」
　そして、広間にいる全員が声をそろえて言った。
「この国から出て行け！」
　こうして、王様は国を追い出されてしまった。
　光人は、
「ぼくは、他の国の姫と結こんします。ぼくより、聖さんの方が姫のおむこさんにふさわしいと思います」
　そう言って、にこにこ笑いながら去っていった。
　みんなは、ぼくに姫と結こんするように言った。
　ぼくも姫も賛成だった。
　ぼくと姫の結こん式は次の日に行われた。
　ぼくはとても幸せだった。

　あれから一年、ぼくは王になり国を治めている。
　光人は他の国の姫と幸せになったと便りが来た。
　姫とぼくはいつも仲良く過ごしている。
　けんかなんて全然しない。
　ずっといっしょ。
　今日も、国は平和だった。